時論
新論
理想論

小学生、みんぱくを航海する

加藤 謙一
（かとう けんいち）
本館機関研究員

展示場という大海原

広島県の私立なぎさ公園小学校の五年生六七人と先生が六月の二日間にわたり民博を訪れてくれた。担当の林原慎先生が、昨年夏に民博で開催された博学連携教員研修ワークショップに参加し、民博を学校教育のなかで活用するヒントをえたことが縁だった。わたしたちは、ワークショップ参加者からの初めての連携の打診であったことに加え、二日間を丸ごと民博での活動に当てるために広島から来てくれることに大いに驚き、喜んだ。

林原先生との打ち合わせの結果、展示場という大海原を航海するための「みんぱくナビ」作りを活動の中心に、学校と民博とボランティアグループ「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」による共同試行プログラムができあがった。ここでは、六七人のみんぱく航海者が誕生するまでをご紹介しよう。

漂流からナビ作り

来館初日。午後一時に到着した子どもたちが民博やMMPとのあいさつを終えると、早速、民博の情報企画係の岸本菜穂美さんから、オセアニア文化と太平洋の人びとが培ってきた航海術の紹介が始まった。岸本さんは、子どもたちに民博の研究成果をわかりやすく伝える術を心得たエデュケーター的存在だ。航海術の話は、続く展示場漂流につながる。子どもたちは大海原に見立てた展示場を漂流しながら、位置を知る手掛かりや気に入った展示物を見つけていった。

オセアニアの海図をヒントにナビを作っていく

漂流から戻った子どもたちのなかには、いろいろな展示場のイメージが刻まれていた。美術の松谷夏子先生が担当したナビ作りの時間は約三時間三〇分。そのあいだ、子どもたちは展示場と製作場所の往復をしながら、それぞれのイメージをかたちにしていった。ある子は、展示場の平面図の上に、色画用紙や毛糸などを駆使して目印となる展示物を作っていく。展示物のありかを世界地図でもわかるようにしたり、オセアニア地域の海図そっくりの斬新なナビを生み出す子もいる。できあがったナビは、展示場への彼らのまなざしが反映されていて、どれもとてもおもしろい。最後は、完成したナビでMMPの方々を案内する展示場航海に出発。ナビをきっかけに展示物の話題が次々と飛び出し、日ごろから展示場をよく知るMMPの方々も子どもたちの新鮮な視点に感心しきりだった。

短くも濃密な二日間。別れのあいさつには、涙ぐむ子どもたちと岸本さんの姿があった。彼らが出合った民博は、本物の資料と向き合い、手を動かし、異なる立場や世代間で語り、経験を共有できる場であったといえる。

なぎさ小の子どもたちのように、「はじめての民博体験は学校の遠足」という来館者は少なくない。この機会を将来にわたる民博との関係を築く最初の大切なチャンスと考えるなら、わたしたちは今以上にすべきこと、できることがあるにちがいない。今回ご紹介したプログラムを今すぐ民博のメニューに加えることは、制度面や人的面から難しいものの、六七人の航海者たちのきらきらした瞳に出会ったわたしは、そう考えずにはいられないのである。